

【ニュージーランド短期留学報告】

宝 物

萩田 茜（東北公益文科大学公益学部4年）

ニュージーランド短期留学（2015年2月12日～3月9日）のことを綴るとなると、思い出が多すぎて何から話していいか分からないほどだ。私はこの短期留学を経験し、多くのものを得ることとなった。

私のホストファミリーは、両親と7人の子ども、1人の孫、2匹のチワワと2匹の猫の大家族である。長時間のフライトを経てたどり着いたニュージーランドで、初めてホストファミリーと対面したあの時のことを、今でも鮮明に覚えている。迎えに来てくれた Charleen（母）に準備してきた挨拶の言葉をたどたどしく口にすると、いよいよホームステイが始まるのだというワクワクと緊張で胸がいっぱいになった。自宅へと向かう車に乗り込むと、当時7歳の Elizabeth（四女）と1歳の Kyla（孫）と0歳の Hope（五女）が乗っていた。おしゃべりな Elizabeth と Charleen のやりとりは上手く聞き取れなかったが、車内がとても賑やかだったため、だんだんと緊張が薄れていった。

ここから始まった Seiuli ファミリーとの生活は、私にとって波乱万丈であった。ホームステイ申いつも私の隣にいてくれた Elizabeth は、元気で明るいおてんば娘だ。ホームステイ初日、まだ荷物の整理もつかないうちから私を庭へ連れ出し、トランポリンで暗くなるまで遊んでいたのが大変懐かしい。「I'm rose!」「I'm butterfly!」と言い合ってから始まる戦いごっこが好きで、暇さえあれば遊んでいた。Elizabeth は私に簡単な言葉を選んで、ゆっくりと話してくれた。理解できなかった言葉を私が繰り返すと、何度も丁寧に教えてくれたため、大変勉強になった。同時に、7歳とは思えない、なんて思いやりのある人なのだろうと感心した。私は少し年の離れた妹ができたようで、本当に嬉しかった。

また、Seiuli ファミリーは本当にアクティブで、短い滞在期間の間に多くの場所に連れて行ってくれた。Issac（長男） Benjamin（次男） Jemma（三女）のバスケットボールの試合やピクニック、買い物、牧場、ブルーベリー畑、バーベキュー、パーティーなどなど…。特に教会に関しては、ほぼ毎日行っていた。教会のステージでは、歌やバンドの演奏が行われたり、お祝い事が行われたりした。定期的に、地元の子どもたち（～25歳くらい）によるゲームも行われていた。人種や年齢の異なる多くの人が集う教会は、私にとって出会いの場となった。はじめのころは見事に人見知りを発揮してしまい、会話も受け身になっていた。しかし下手で当たり前なのだから、自分から話しかけてみようという気持ちになり、積極的になることができた。ここで出会った人たちと仲良くなりたいという思いが、そうさせたのだろう。おかげで私は、本当に多くの人と会話を交わすことができた。

教会でのゲームでは、特にコミュニケーション力が養われたように思う。上手く会話が

できなくても、ゲームを通して友達を増やすことができた。ニュージーランド滞在の終盤、何度目かのゲームに参加していた時、突然 **Jemma** が「**Akane!**」と言って手を引きながら走ってくれた。普段名前を呼ぶことがなかった **Jemma** が名前を呼んでくれた時、涙が出るほど嬉しかった。友達もいつの間にか私の名前を覚えてくれて、驚きと嬉しさが混じった、初めての気持ちになった。

帰国する前日、ホストファミリーがお別れ会をしてくれた。夕飯の時には、家族ひとりひとりから質問を受けた。日本とニュージーランドの違いや、何を学ぶことができたか、美味しかった食べ物は何かなど、ユニークな質問もあった。このように、私が英語を話すきっかけを与えてくれたことも感謝している。そのあと私から手紙を読み、やっと帰国するのだと実感が湧いた。突然 **Benjamin** が、漢字で私の名前はどう書くのか尋ねてきた。紙に書いて教えると、数分後“萩田茜へ”“べんじいより”と書いた手紙をプレゼントしてくれた。ほかのみんなも、思いを言葉にして伝えてくれ、胸が熱くなった。私は典型的な日本人体質で、これまでは素直に話せないことが多々あったが、この留学を通して、思いは言葉にしないと伝わらないということを実感した。留学中に狩野先生が話してくださった「いい意味で空気を読まない」ことは、本当に大切だと感じた。

涙の中荷造りをしていたら、もう寝ているはずの **Elizabeth** が私の部屋へ泣きながらやってきた。本当の家族のように慕ってくれた **Seiuli** ファミリーとの別れは本当に辛かった。

この短期留学を通して、私は多くのものを得ることができた。正確な英文法を身に付けられたかは不確定だが、人と人とのコミュニケーション力は向上したといえる。そして何より、ニュージーランドにもう一つの家族と友達という宝物をつくることができた。現在でも、フェイスブックや何度かの手紙を通して繋がりを保っている。今では **Seiuli** ファミリーや友達とたくさん話したいという気持ちが、英語やニュージーランドの政治・文化などを学ぶモチベーションとなっている。あの時、短期留学の参加を決意して本当に良かった。もともと英語が苦手な私が、得意の大きなリアクションで乗り切ることができたのだ。この経験を自信にし、これからも外の世界に視野を広げ、挑戦を続けていきたい。

